『中国地区英語教育学会研究紀要』No. 14 (1984. 8. 1)

英語の授業における Teacher — talk の研究

広島大学大学院　柳　善和

0. はじめに

言語習得の際，学習者は何らかの言語情報 (input) をもとにしていると考えられる。 Krashen (1981: 46) は次のように述べている。

> While the characteristics of utilized primary linguistic data (termed 'intake' in recent years) have not been determined in detail, mere 'head language' is probably insufficient input for the operation of a language acquisition device at any age . . . the relevant primary linguistic data are those which the acquirer is actively involved with: the total linguistic environment is less important.

この中で，「単に耳にするだけのことば」よりも「学習者自身がその場面で関与していることば」が言語習得のためは効果的ではないのかということが述べられており，言葉をかえると，それはコミュニケーションのための言語ということになる。

この研究は，上記のことを念頭において，日本の中学校・高等学校の英語の授業で，どのような teacher-talk がどのくらい与えられているかを調査・分析することである。

1. 調　査

1. 1 調査対象

調査対象は，中学校 3 年生 2 クラス，高等学校 1 年生 4 クラスの英語の授業，6 時間分である。6 つの授業 (A～E) は次の通りである。

A: 英語母国語話者 (英国人) による授業 (高 1)
B: ベテランの日本人教師による授業 (中 3)
C: 英語母国語話者 (米国人) と日本人教師による授業 (高 1)
D: C と同じ。但し日本人教師及びクラスは別である。
E: 教育実習生による授業 (高 1)
F: 教育実習生による授業 (中 3)

1. 2 調査方法

まず量的な調査のために，それぞれの授業を録音したテープからすべての発話を書き取る。次に各々の発話及び発話間のポーズを計測し，Kakita (1984) で採られた方法に従って分類し集計を行う。ここでは，この研究と関連のある結果のみを扱う。まず授業の中で使われている「日本語」「英語」「その他」の割合，次に教師・生徒別の英語使用の割合，そして，「ドリル活動」以外で使われている英語の割合である。

次に質的な調査として，授業の中で教師がドリル活動以外で使っている英語を取りあげる。まず全体の発話数を次の方法で数える。

① 重文は各々の単文に分けて数える。
② 複文は 1 つと数える。
③ 次の(i)～(iii)も 1 つの発話として数える。

(i) 談話の区切りを表すことば (OK./Now./All right. など)

(ii) 相手の理解を確認するためのことば (OK?/All right? など)

(iii) 生徒の返答を評価することば (Good./That's right. など)

上記の手順によって数えられた発話を以下の 4 項目について分析する。

① 上の③に分類される(i)−(iii)の発話の数とその割合

② 単文の割合

③ 一発話に含まれる平均語数

④ 発話の種類

③の平均語数を数える際には，false start 及び発話のうち 1 部の語句を繰り返している部分は語数に含めていない。④の発話の種類は以下の 4 つに分類される。 A: 平叙文， B: 疑問文， C : 命令文，C' : 命令文以外で命令の機能を持つもの。

2. 結果と考察

まず量的分析による結果を示す。図 1 は， A − F の授業の中での，「英語」「日本語」「その他」の割合を示している。「その他」の大部分は沈黙である。図 2 は A−F の授業の中での英語と日本語の割合を教師 (T) ・生徒 (P) 別にみたもので，数字は英語の割合を示している。

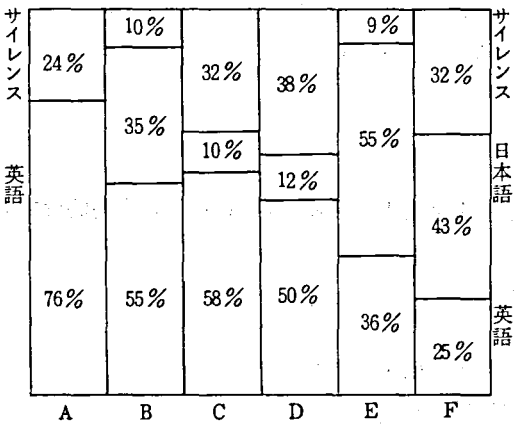

図 1

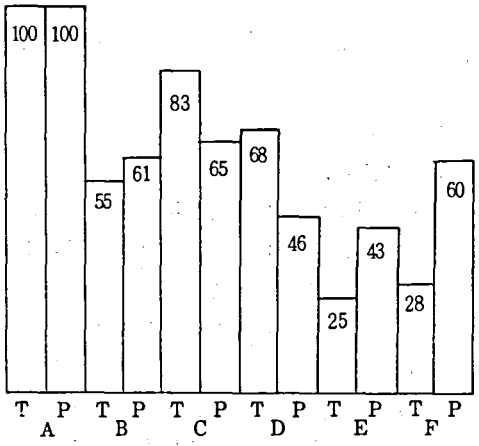

図 2

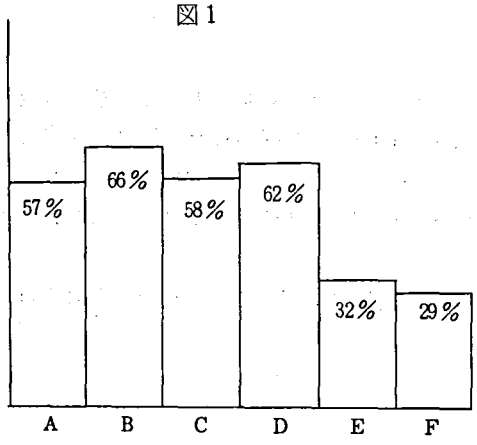

図 3

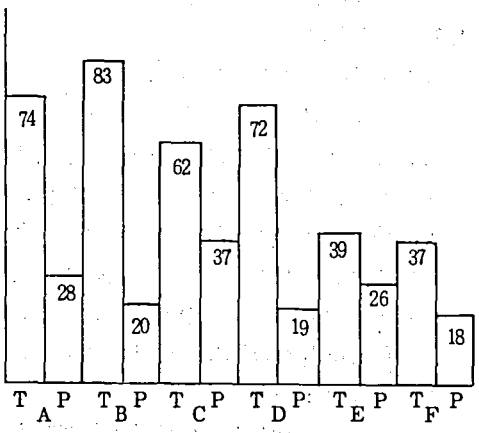

図 4

この2つの図より，教生の行ったE，Fの授業で英語の使われている割合，特に教師が英語を使う割合が少ないことがわかる。次に図3では，授業で使われている英語のうち，ドリル活動以外で用いられている英語の割合を示している。図4は，それを教師・生徒別に表したものである。

図3，図4は，教生の行った授業で使われている英語の約7割はドリル活動のためのものであることを示している。また全クラスとも生徒がドリル活動以外で英語を使う時間が少ないことも図4からわかる。

次に質的分析による結果を示す。まず質的分析として行った4項目の分析のうち①の結果を表1に示す。

表1

	A	B	C	D	E	F
total number of (i), (ii), (iii) (%)	225 (39.2)	100 (35.1)	88 (40.6)	96 (30.4)	4 (10. 5)	14 (23.3)
(i) (%)	69 (30.7)	38 (38.0)	20 (22.7)	15 (15.6)	1 (25.0)	6 (42.9)
(ii) (%)	58 (25.8)	23 (23.0)	33 (37.5)	42 (43.8)	0 (0)	0 (0)
(iii) (%)	98 (43.5)	39 (39.0)	35 (39.8)	39 (40.6)	3 (75.0)	8 (57.1)

表1より，これらの発話が全発話数に占める割合は，AからDの授業では，30～40%であるのに対して，E，Fの授業では10～20%であることがわかる。このことから，E，Fの授業では英語が一方的に教師から生徒に与えられ，会話としてぎこちない感じを与えているのではないかと考えられる。次に②，③の結果を以下の表2，表3にそれぞれ示す。

表2

	A	B	C	D	E	F
全発話数	349	185	129	220	34	46
単文の数	332	179	124	204	29	44
単文の割合	95.1	96.8	96.1	92.7	85.3	95.7

表3

	A	B	C	D	E	F
全発話数	349	185	129	220	34	46
全語数	1686	1271	784	1123	216	262
1発話あたりの平均語数	4.83	6.87	6.08	5.10	6.35	5.70

表2は，5つの授業で教師の使う英語の90%以上が単文であったことを示し，また表3は，A－Fの授業で教師の使う英語の発話は5～6語の長さであることを示している。このことから，この6つの授業で教師の使う英語は，生徒が教科書等で接する英語よりも幾分平易であると考えられる。最後に④の結果を表4に示す。

表 4

	A	B	C	D	E	F
全発話数	349	185	129	220	34	46
A	127	117	75	47	11	12
(%)	(36.4)	(63.2)	(58.1)	(21.4)	(32.4)	(26.1)
B	105	34	31	119	21	17
(%)	(30.1)	(18.4)	(24.0)	(54.1)	(61.7)	(36.95)
C+C'	117	34	23	54	2	17
(%)	(33.5)	(18.4)	(17.9)	(24.5)	(5.9)	(36.95)
C	73	33	17	28	2	17
(%)	(20.9)	(17.8)	(13.2)	(12.7)	(5.9)	(36.95)
C'	44	1	6	26	0	0
(%)	(12.6)	(0.6)	(4.7)	(11.8)	(0)	(0)

この分析では各授業の間でばらつきがあるが，命令文及び命令の機能を持った発話が多い傾向があるのではないかと考えられる。

これらの分析から次の2点が指摘できよう。第1に，ドリル活動以外で使われる英語が少ないこと（特に教育実習生の授業の場合）。第2に，使われている英語は平易なものであることである。言語習得の際のドリルの重要性は否定できないが，それだけでは学習者がその言語を習得するためには不充分であろう。この点については今後考慮される必要がある。

3. 今後の課題

授業で用いられている英語の質的分析については今後の課題とされることが多い。

まず，この研究では分析の対象を教師による英語の発話に限定したが，実際の言語習得の際には，一方的に周囲の人から与えられる発話よりも，会話のやり取りに参加することによって言語習得は促進されると言われる。このため，授業の中での教師と生徒の細かいやり取りを別々に分析するのではなく，1つのかたまりとして，量・質の両面から分析していく必要がある。例えば，表1で示した種類の発話が，教師の使う英語のどこに出てくるのか等の問題もこれに含まれよう。また生徒から発話を引き出すために教師が用いる方法（経験の少ない教師が問いを繰り返すだけに終りがちなのに対して，経験豊かな教師は問をやさしくしたり，生徒の発話をもとに問を変化させたりする等）も分析されなくてはならないだろう。

次に，この研究で行われた分析では，各授業で用いられている英語を変化させている要因が明確になっていない。つまり，いずれかの項目で差が生じているとしても，その差が，例えば，教師の違いによって生じたものか，授業内容の違いによって生じたものか等は明確ではない。このことを解決していくためには，より多くの授業を分析しデータを蓄積していくこと及びより効果的に質的分析を行うための方法を開発することが必要となってくるであろう。

Reference

Kakita, N. (1984) "An Analysis of Classroom Interactions TEFL Student Teachers," *Bulletin of the Faculty of Education, Hiroshima University*. Vol. 32, Part 2.

Krashen, S.D. (1981) *Second Language Acquisition and Second Language Learning*. Oxford: Pergamon Press.